新約聖書 ヨハネによる福音書 15 章 9 節―12 節（新共同訳）

[9]父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛してきた。わたしの愛にとどまりなさい。[10]わたしが父の掟を守り、その愛にとどまっているように、あなたがたも、わたしの掟を守るなら、わたしの愛にとどまっていることになる。

[11]これらのことを話したのは、わたしの喜びがあなたがたの内にあり、あなたがたの喜びが満たされるためである。[12]わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である。

※第 1 朗読と第 2 朗読は末尾に掲載

説教「愛にとどまる」

本日は、「平和の主日」です。平和というとき、国と国との間で戦争がない状態を指すことが多いですが、今回は、私たち一人一人における真の平和とは何か、ということを、聖書から聞いていきたいのです。

19 世紀から 20 世紀のアメリカの哲学者、心理学者であるウィリアム・ジェームズは「二度生まれ」（トゥワイス・ボーン Twice Born）という概念を提唱しました。

それは、人は究極の苦しみを経たり、心を病み抜いた時に、はじめてそれを突き抜けた境地に達し、新しい価値や、それまでとは異なる人生の意味をつかむことができるという考え方です。

「病める魂」の人々は、幸福になるために二回の生誕を必要とする、すなわち、生物的な誕生ののちに、生きながらにして新しく生まれ変わるような精神的な誕生を必要とするというのです。

ジェームズは「健全な心」で普通に一生を終える「一度生まれ」（ワンス・ボーン）よりも、「病める魂」で二度目の生を生き直す「二度生まれ」の人生の方が尊いと述べました。

「二度生まれ」の人たちは、非常に苦しい人生を送らざるを得ず、心と精神を病んだり、死ぬことを考えたり、引きこもったりしてしまいます。しかし、ジ

ェイムズはそのような人たちが、悩み苦しみ、七転八倒したのちになんらかの境地に辿り着けた時こそ、「一度生まれ」の人々よりも、はるかに素晴らしいものを獲得できているはずだと考えました。

ジェイムズは、「病める魂」が「悪の現実」を通して、深い真理へ到達しうる点で、「健全な心」よりも包括的であると説きました。ここでの「包括的」とは、すべてを内包し、幅がある様を表しているのでしょう。

現実世界の悪にまみれて苦しんだり、自分を劣等、劣った存在であると思っていた「病める魂」の人間が、神なる存在を通して、生物的な誕生ののちに霊的に新しく生まれ変わる。これを、「回心」「悔い改め」ということもできると思います。

絶望を経験し、霊的に生まれ変わるのが「二度生まれ」の人です。生きながらにしての自分自身の死や、罪に出会ってこそ、本来の人間性が立ち上がるのです。

ジェイムズはまた、こうも言っています。

一度生まれの人の宗教は、世界は「一種の直線的なもの」、あるいは「一階建てのもの」である。これに反して、二度生まれの人の宗教にあっては、世界は「二階建ての神秘」であると。

さて、本日の福音書は、イエスの愛についてのメッセージです。これは、イエスが十字架にかかる前の夜、最後の晩餐の席で弟子たちに語ったものでした。イエスは、この命懸けの十字架の愛で弟子たちのことを愛されながら、「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい」と教えたのです。

旧約聖書でも、自分自身を愛するように隣人を愛せと命じています。（レビ記19:18）しかし古くからあるこの愛の掟に、イエスの「わたしがあなたがたを愛したように」という言葉が加わったことによって、「新しい愛の掟」が完成したのです。この掟は、すべてイエス・キリストの愛の中にあります。イエスはその愛をもって、私たちのために十字架にかかり命を捧げてくださいました。

イエスは「これがわたしの掟である」と言いました。イエスはこの新しい愛の掟を私たちに与え、私たちに「自分たちの愛」だけで愛し合うことなく、聖霊

が私たちの心に吹き込んだ「キリストの愛」をもって愛するように招いているのです。

聖書に「神は愛である」と記されているように、イエスの愛は、神に起源を持っています。イエスの説く愛は、神に根ざしており、イエス自身に神の愛が与えられたことから来ています。この神の愛が、イエス・キリストによって私たちに与えられました。

主イエス・キリストの愛とは、普遍で、無条件、無限の神の愛であり、それは十字架上で頂点を迎えました。神の御子が究極に身を低くし、神に完全に自らを委ねたその時、キリストは、満ち満ちた究極の愛を、この世界と私たちに与えたのです。

今回、この福音書について思いを巡らしていたとき、ある方から、アインシュタインが娘リーゼルに書いた手紙のことを教えていただきました。その手紙の一部を引用します。

> 現段階では、科学がその正式な説明を発見していない、ある極めて強力な力がある。それは他のすべてを含みかつ支配する力であり、宇宙で作用しているどんな現象の背後にも存在し、しかも私たちによってまだ特定されていない。この宇宙的な力は愛だ。
>
> 科学者が宇宙の統一理論を予期したとき、彼らはこの最も強力な見知らぬ力を忘れた。
> 愛は光だ。
> それは愛を与えかつ受け取る者を啓発する。
> 愛は引力だ。
> なぜならある人々が別の人々に惹きつけられるようにするからだ。
> 愛は力だ。
> なぜならそれは私たちが持つ最善のものを増殖させ、人類が盲目の身勝手さのなかで絶滅するのを許さないからだ。
> 愛は展開し、開示する。
> 愛のために私たちは生き、また死ぬ。
> 愛は神であり、神は愛だ。
> （中略）
> 私たちがこの宇宙的エネルギーを与えかつ受け取ることを学ぶとき、愛しいリーゼル、 私たちは愛がすべてに打ち勝ち、愛には何もかもすべてを

超越する能力があることを確信しているだろう。なぜなら愛こそが生命の神髄(クイントエッセンス)だからだ。

暑い毎日が続きます。

私たちも、日々、新たに生まれ変わりながら、愛と共に歩んでいきましょう。

＊＊＊＊＊＊ 説教ここまで ＊＊＊＊＊＊

以下、本日に関連する聖書箇所（第１朗読と第２朗読）です。

旧約聖書 ミカ書４章１節―5節（新共同訳）

[1]終わりの日に／主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち／どの峰よりも高
くそびえる。もろもろの民は大河のようにそこに向かい／[2]多くの国々が来て
言う。「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。主はわたしたちに道を示さ
れる。わたしたちはその道を歩もう」と。主の教えはシオンから／御言葉はエ
ルサレムから出る。[3]主は多くの民の争いを裁き／はるか遠くまでも、強い
国々を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし／槍を打ち直して鎌とする。
国は国に向かって剣を上げず／もはや戦うことを学ばない。
[4]人はそれぞれ自分のぶどうの木の下／いちじくの木の下に座り／脅かすもの
は何もないと／万軍の主の口が語られた。[5]どの民もおのおの、自分の神の名
によって歩む。我々は、とこしえに／我らの神、主の御名によって歩む。

新約聖書 エフェソの信徒への手紙２章13節―18節（新共同訳）

[13]しかしあなたがたは、以前は遠く離れていたが、今や、キリスト・イエス
において、キリストの血によって近い者となったのです。
[14]実に、キリストはわたしたちの平和であります。二つのものを一つにし、
御自分の肉において敵意という隔ての壁を取り壊し、[15]規則と戒律ずくめの律
法を廃棄されました。こうしてキリストは、双方を御自分において一人の新
しい人に造り上げて平和を実現し、[16]十字架を通して、両者を一つの体として
神と和解させ、十字架によって敵意を滅ぼされました。[17]キリストはおいでに
なり、遠く離れているあなたがたにも、また、近くにいる人々にも、平和の
福音を告げ知らせられました。[18]それで、このキリストによってわたしたち両
方の者が一つの霊に結ばれて、御父に近づくことができるのです。

教会讃美歌　118番「来たりたまえ」1,2,4節、150番「つきぬ恵み」1,2,4節、172番「つくりぬしを」1,2,5節、239番「ひととなりたる」1,2,4節、313番「主はへりくだりて」1,2節